

〔Ⅲ〕 次の(A)～(C)の各史料に関する問1～問15について、(ア)～(ウ)の中から最も適切な語句を選び、その記号をマークしなさい。

(A) さてこの式目をつくれ候事は、なにを本説として被^{ちゆうしのせらるるのよし}注^し載^せ之^{のよし}由、人さだめて^{ぼうなん}謗^{くわうこと}難^{そうろうか}を^{こと}加^{こと}事^{こと}候^{こと}歟。ま事にさせる本文にすぎりたる事候はねども、たゞ(①)の^(推)おすところを被^推記^推候^推者也。かやうに兼日にさだめ候はずして、或はことの理非をつぎにして其人のつよきよはきにより、或は、御裁許ふりたる事^(忘)を^(忘)わすらかしておこしたて候。かくのごとく候ゆへに、かねて御成敗の躰をさだめて、人の^{こうげ}高^{ろんぜず}下^{へんぼ}を^{へんぼ}不^{へんぼ}論^{へんぼ}、偏^{へんぼ}頗^{へんぼ}なく^{へんぼ}裁^{へんぼ}定^{へんぼ}せられ候はんために、子細^(置)記^(置)録^(置)しを^(置)か^(置)れ^(置)候^(置)者也。(中略)この式目は只かなをしれる物の世間におほく候ごとく、あまねく人に心えやすからせんために、武家の人へのはからひのためばかりに候。これによりて京都の御沙汰、(②)のおきて^{いささか}聊^{いささか}も^{いささか}あら^{いささか}たま^{いささか}る^{いささか}べきに^{いささか}あ^{いささか}らず^{いささか}候^{いささか}也。^{およそほうりよう}凡^{およそほうりよう}法^{およそほうりよう}令^{およそほうりよう}のおし^{およそほうりよう}へ^{およそほうりよう}め^{およそほうりよう}で^{およそほうりよう}た^{およそほうりよう}く^{およそほうりよう}候^{およそほうりよう}な^{およそほうりよう}れ^{およそほうりよう}ども、^{およそほうりよう}武^{およそほうりよう}家^{およそほうりよう}の^{およそほうりよう}なら^{およそほうりよう}ひ、^{およそほうりよう}民^{およそほうりよう}間^{およそほうりよう}の^{およそほうりよう}法、^{およそほうりよう}それ^{およそほうりよう}を^{およそほうりよう}う^{およそほうりよう}か^{およそほうりよう}ゞ^{およそほうりよう}ひ^{およそほうりよう}し^{およそほうりよう}り^{およそほうりよう}た^{およそほうりよう}る^{およそほうりよう}物^{およそほうりよう}は^{およそほうりよう}百^{およそほうりよう}千^{およそほうりよう}が^{およそほうりよう}中^{およそほうりよう}に^{およそほうりよう}一^{およそほうりよう}兩^{およそほうりよう}も^{およそほうりよう}あ^{およそほうりよう}り^{およそほうりよう}が^{およそほうりよう}た^{およそほうりよう}く^{およそほうりよう}候^{およそほうりよう}歟。^{よって}仍^{よって}諸^{よって}人^{よって}し^{よって}ら^{よって}ず^{よって}候^{よって}処^{よって}に、^{にわか}俄^{にわか}に^{にわか}法^{にわか}意^{にわか}を^{にわか}も^{にわか}て^{にわか}理^{にわか}非^{にわか}を^{にわか}勸^{にわか}候^{にわか}時^{にわか}に、^{かんがえ}法^{かんがえ}令^{かんがえ}の^{かんがえ}官^{かんがえ}人^{かんがえ}心^{かんがえ}に^{かんがえ}ま^{かんがえ}か^{かんがえ}せ^{かんがえ}て^{かんがえ}軽^{かんがえ}重^{かんがえ}の^{かんがえ}文^{かんがえ}ども^{かんがえ}を、^{かんがえ}ひ^{かんがえ}き^{かんがえ}か^{かんがえ}む^{かんがえ}が^{かんがえ}へ^{かんがえ}候^{かんがえ}な^{かんがえ}る^{かんがえ}間、^{かんがえ}其^{かんがえ}勸^{かんがえ}録^{かんがえ}一^{かんがえ}同^{かんがえ}な^{かんがえ}ら^{かんがえ}ず^{かんがえ}候^{かんがえ}故^{かんがえ}に、^{かんがえ}人^{かんがえ}皆^{かんがえ}迷^{かんがえ}惑^{かんがえ}と^{かんがえ}云^{かんがえ}云、^{ともがら}これ^{ともがら}により^{ともがら}て^{ともがら}文^{ともがら}盲^{ともがら}の^{ともがら}輩^{ともがら}も^{ともがら}か^{ともがら}ね^{ともがら}て^{ともがら}思^{ともがら}惟^{ともがら}し、^{ともがら}御^{ともがら}成^{ともがら}敗^{ともがら}も^{ともがら}変^{ともがら}々^{ともがら}な^{ともがら}ら^{ともがら}ず^{ともがら}候^{ともがら}は^{ともがら}ん^{ともがら}た^{ともがら}め^{ともがら}に、^{ちゆうしおか}この^{ちゆうしおか}式^{ちゆうしおか}目^{ちゆうしおか}を^{ちゆうしおか}注^{ちゆうしおか}置^{ちゆうしおか}れ^{ちゆうしおか}候^{ちゆうしおか}者也。^{くわうる}京^{くわうる}都^{くわうる}人^{くわうる}々^{くわうる}の^{くわうる}中^{くわうる}に^{くわうる}謗^{くわうる}難^{くわうる}を^{くわうる}加^{くわうる}事^{くわうる}候^{くわうる}は^{くわうる}ゞ、^{おもむき}此^{おもむき}趣^{おもむき}を^{おもむき}御^{おもむき}心^{おもむき}え^{おもむき}候^{おもむき}て^{おもむき}御^{おもむき}問^{おもむき}答^{おもむき}あ^{おもむき}る^{おもむき}べ^{おもむき}く^{おもむき}候^{おもむき}。恐^{おもむき}々^{おもむき}謹^{おもむき}言^{おもむき}

1232
貞永元

九月十一日

駿河守殿
④

武蔵守在^(判)
③

(『御成敗式目』唯浄裏書本)

問1 この史料は、御成敗式目を定める趣旨を記した書状である。(①)に入る語句はどれか。

(ア) どうり (イ) おしへ (ウ) みこころ

問2 文中の(②)に入る語句はどれか。

(ア) 式目 (イ) 格式 (ウ) 律令

問3 差出人の下線部③の「武蔵守」は誰か。

(ア) 北条時頼 (イ) 北条泰時 (ウ) 北条義時

問4 宛所の下線部④「駿河守」は、北条重時である。彼がこの時に就任していた職は何か。

(ア) 六波羅探題 (イ) 鎮西奉行 (ウ) 引付衆

問5 この文書が出された時期の幕府の将軍は誰か。

(ア) 源実朝 (イ) 宗尊親王 (ウ) 藤原頼経